

# こんな本を

# 読みました

令和6年度版



町民のみなさまへ

この冊子は、『広報あみ』（おしらせ版・図書館だより）に掲載されている『阿見読書クラブ』の会員による書評を  
まとめたものです。

読書の楽しさがみなさんに伝われば幸いです。

ぜひ、ご一読ください。

阿見町 教育委員会 生涯学習課

読書推進委員会

TEL 029 - 888 - 2526



## 本の好きな方「読書クラブ」に入りませんか

「阿見読書クラブ」は毎月一回、第四日曜日午前十時から図書館で会合を開いています。

平成十二年に発足し今年で二十五年目、現在六十代から八十代の本の好きな人達十一人が読後の感想や作家の人生観などを話し合っています。テーマ作家を決める月と自分の好きな本の感想を話し合う月とを交互に実施しています。

何時も、本の事だけでなく自分が住んでいる地域の身近なことから現在マスコミで話題になっていることまで、自由に話し合う情報交歓の場でもあります。

そして文芸作品の映画鑑賞や作家の講演。中でも会員の楽しみは、作家ゆかりの地を訪ねる文学散歩です。鷗外や漱石が住んでいた東京本郷界隈や樋口一葉記念館、白洲次郎正子邸を始め太宰治の津軽や藤澤周平の鶴岡などへ、花や紅葉の季節に温泉も兼ねながら行きました。又、秋にはふれあいの森でバーベキューや芋煮会を実施しています。

本を読むことでいろいろな知識を得ながら、多くの人達と交流出来る。あなたに豊かな人生が広がります。皆様の御入会を心からお待ち致しております。

阿見読書クラブ会長 田村敏衛

## 「筑波根物語」 水上勉 河出書房新社 (令和四年四月)

筑波根詩人といわれた茨城県下妻市出身の横瀬夜雨の生涯が描かれています。夜雨は明治十一年大宝村(下妻市)の豪農の二男に生まれましたが、四歳の時に脊柱が曲がる病に罹りました。学校では成績優秀でしたが友達と遊べず、家で本を読んだり詩を書いたりしました。十八歳の時に新興詩壇文庫派の主唱者、河井醉茗に見出され、文庫派の三羽鳥と称されました。病の苦しみの中で純真多感な抒情詩を書き続ける夜雨が女子文壇の選者になってからは、閨秀詩人達がその境遇に同情して妻になると言っては次々に生家を訪れました。しかし、本人に会ってみると皆戸惑うばかりでした。そんな中、山方村(常陸大宮市)出身の女性を妻にします。河井醉茗や北原白秋らと一緒に筑波山に登った時の詩「ああ山は筑波嶺 天低く 立てれども 命哉 ながらへて われ終ひに 登りたる」

この小説は著者の没後二年を経て発見された未刊行のもので、死の直前まで手直しを重ねた傑作です。

読書クラブ 田村敏衛

## 「日本のワインで奇跡を起す」 三澤茂計・三澤彩奈

ダイヤモンド社 (令和四年五月)

本書は、山梨県勝沼にあるグレイスワイナリーが、父と娘の努力と社員の協力のもと世界に挑戦し、ロンドンで開催された世界最大級のワインコンクールで日本初の金賞を

受賞した物語です。

風景や海外研修の状況が素晴らしく描写されています。勝沼は新緑の頃を過ぎると白く可憐な花が咲きほのかな甘い香りを漂わせませす。秋になるとグレイシイスピンの実へ変化していきます。父が日本一日照時間の長い場所に植栽し、娘が南半球の産地で研修した方法で栽培した結果、樹になっていて実の糖度が二十五度を超える房もできました。世界各国からコンクールに出品された一万五〇〇七銘柄中、一五八銘柄が金賞を受賞しました。「良いワインを造る心得はワインに対する愛情が大切です」とあります。仕込み、ものに心をこめて接することを再認識した書です。一読をお勧めします。

読書クラブ 小松崎克巳

### 「いのちの停車場」 南杏子 幻冬舎 (令和四年七月)

主人公は、白石咲和子。救急救命センターで副センター長を務める六十二歳の女医です。咲和子はある事情で救急医を辞め、訪問診療医となります。彼女のその活躍を描いた物語です。内容は、プロローグを含め、全七つの章に分かれています。私は六つめの「第五章 人魚の願い」が一番感動し、感銘を受けました。末期の小児腎腫瘍に冒されている六歳の女の子、「萌ちゃん」の章でした。在宅医療というのは、医師を始め多くの人々の患者に寄り添いたいという気持ちの集合でできる医療であると思いました。命の尽きる最後の日まで、いかにその人らしく生きるか、そうした日々を支える存在になろうと考えている様々な在宅医療に関わる人々が存在するのだということを、改めて教えてくれる小説です。

余談ですが、この小説は二〇二二年吉永小百合主演で映画化されました。西田敏行、松坂桃李等が共演しています。石田ゆり子のシーンは、小説の中には存在しないシーンとなりました。興味のある人は、小説と映画の両方を比べられるとまた違った趣があると思います。

読書クラブ 柴山光

### 「自転しながら公転する」 山本文緒 新潮社 (令和四年九月)

田畑しかなかった真つ平らな田舎の真ん中に出し抜けのように現れた世界最大の仏像牛久大仏。主人公の「都」は毎朝大仏を眺める。母親の看病のため東京から茨城の実家に戻り、今は大仏と同じような唐突さで作られたショッピングモールで働き暮らしている。

仕事はキャリアを生かしたファッション関係の職場だが、契約採用の不安定さに加え、正社員からアルバイトまでの上下関係に翻弄される日々。休日は母親に付き添い病院通い、気づけば三十二歳になっていた。

そんな時、都の人生の流れを変える男性と出会う。出会いに直感的なものがあつたわけではないが、二人を結ぶ糸は緩んだり引き合ったりしながら、やがてゴールへと向かう。

仕事、結婚、親との関係を巡り悩みながらも、自分の力で人生を回転させていく都の姿が阿見町を舞台にリアルに描かれていて、見覚えのある阿見町の風景が主人公を身近に感じさせてくれる物語です。

読書クラブ 渡辺治子

「画文集 炭鉱に生きる 地の底の人生記録」 山本作兵衛

講談社 (令和四年十月)

これは、筑豊炭鉱で働いた体験を絵に描いて、平成二十三年に日本で初めてユネスコ世界記憶遺産に認定された山本作兵衛の画文集です。明治二十五年、現在の飯塚市に生まれた作兵衛は子供の頃から絵を描くのが大好きでした。しかし、貧しくて小学校もろくに通えず七歳の頃から坑内に入り、十四歳で兄と共に本格的に働きました。危険で劣悪な坑内は常に死と隣り合わせの作業ですが、閉山を機に五十年勤めたヤマを下りました。そして自ら体験した炭鉱の暮らしや人情を孫達に残そうと絵を描きためました。炭層が低く、立って働く事が出来ずに寝た状態で採掘する「寝掘り」という絵は、実際に経験した人でないと分からない事を臨場感たっぷりにユーモラスに描いています。

日本の近代化の心臓部となった筑豊炭鉱の在りし日の姿を、一人の炭鉱夫が驚くべき正確さと緻密さで克明に描いた感動のこの本を、是非手に取って欲しいものです。

読書クラブ 田村保子

「太平洋戦争 最後の証言」 第一部、第三部 門田隆将 小学館 (令和四年十一月)

戦後七十七年が過ぎ、大正生まれの人々の戦いであった太平洋戦争で生き残った人々の証言を三部作にまとめたノンフィクションです。一千万人も若者が戦場に投入され戦死者二三〇万人、その多くが陸軍(第二部参照)の一六五万人でした。全体の七十七%を占めます。第一部は「零戦・特攻編」です。当時の最新鋭機の零戦でさえ、無線がダメだったという致命的な欠陥があったことや、米軍の通訳が生き残った日本人の捕虜に「この闘いは人間を人間として扱ってない国と、人間を人間として扱っている国の闘いです。」といったことが印象的です。

第二部は「陸軍玉砕編」です。物資の豊富な国と精神論のみで戦う国の悲惨さが読み取れます。現代の日本で失われつつある、礼儀、品位、恥の文化を認識することができます。

第三部は「大和沈没編」です。燃料の補給のない沖縄戦へ旅立つ大和が悲壮感そのものです。この三部作を読破した後、町の「予科練平和記念館」へ出向きました。以前と違った感慨に浸れました。

読書クラブ 柴山光

「最終便に間に合えば」 林真理子 文庫文庫 (令和四年十二月)

本書は、一九八六年 第九十四回直木賞受賞二作品の一つで、作者初期の作品である。主人公の美登里(三十一歳)は、普通のOLから造花手芸家に華々しく転進。旅先での解放感のためか、出張先の札幌で、七年前に東京で別れた男に自ら連絡して再会する。物語は、札幌のレストランにおけるディナーの場面から始まる。その夜の東京への最終便に搭乗するため、男と共に空港へ向かうタクシー内での会話、意図的に主人公を騙しはしないが、女心につけ込み金をせびる男との苦々しい過去の記憶を交えて展開する。その男は、タクシーの中で彼女に対して、執拗にもう一泊するよう迫る。彼女は、過去の女の記憶が蘇り欲望がうずく。しかし、タクシーは最終便に間に合い、美登里は男との別れを確信し搭乗する。

作者が得意とする一人暮らしのOLの恋と性、都会で生きることの孤独を背景とした小説である。主人公の複雑な思いや行動を理解することが難しいのは、私だけであろうか。

読書クラブ 足立秀之

「いのち」 瀬戸内寂聴 講談社文庫 (令和五年一月)

小説一筋の七十年近い作家生活で出会った男達と筆を争った女性作家二人の思い出を中心に、いのちの火を燃やし続けながら書き上げた最後の小説。中でも寂聴と河野多恵子と大庭みな子の三人はライバル同士。

寂聴より四歳年下の河野多恵子は、丹羽文雄主宰の同人誌「文学者」からの親友で、芥川賞受賞作「蟹・幼児狩り」は、小学生の甥と蟹を求めて波打ち際で戯れる中年女性の屈折した心理を描いた。

大庭みな子は夫の転勤に伴いカナダで書いた「三匹の蟹」で芥川賞を受賞し、衝撃的なデビューをした。内容は主婦の不倫だが、寂聴が晴美時代に書いた「花芯」は子宮小説と揶揄され、文壇から五年間干された。「花芯」から「三匹の蟹」迄十一年の時の流れがあった。しかし、みな子は脳梗塞で倒れて半身麻痺となり、夫の介護を受けながら作品を書いた。その二人のライバルも先に亡くなり、令和三年十一月寂聴も九十九歳の天寿を全うした。

読書クラブ 田村敏衛

「名残の花」 澤田瞳子 新潮社 (令和五年二月)

舞台は、一新で明治となったばかりの東京。登場するのは何と丸亀藩に二十三年間も幽閉されていて恩赦で自由の身になった、かの悪名高き鳥居耀蔵、今は胖庵と名乗るまるで浦島太郎の如き老人。彼のせいで連座により改易の憂き目に遭い困窮した生活の家族は彼を冷遇する。家に居場所のない彼は東京の街なかを歩き回って、様変わりした世を嘆く中で、ひよんなことから十六歳の能楽を学ぶ豊太郎という青年と知り合う。彼を通して胖庵は、天保の時代自分が過酷な取り締まりで痛めつけた江戸の人々が、新しい

明治の世を貧しくとも逞しく日々生き抜いていく様を見せつけられる。

このまま古くさい能楽に拘って生きていったら良いのか悩む若者と、元武士の矜持を捨てられないただの老いた隠居の胖庵。時代に取り残されたような二人が新しい世をどう受け入れ折り合いを付けていくのか：鳥居燿蔵は鬼でも妖怪でもなかった、ちゃんと人の心を持つていたと分かってホッとするものがある。

読書クラブ 猪端由紀子

「日本人の手紙 第一巻 親子」 紀田順一郎 リブリオ出版 (令和五年三月)

この本には、二十九通の手紙が掲載されています。森鷗外が娘達に書いた手紙、美空ひばりが父親に宛てた手紙など、いろいろな著名人の手紙を読むことができました。

親が子を思う気持ち、子が親を思う気持ち、どの手紙にもあふれています。その中で父親の愛を強く感じた手紙がありました。マンガの神様である手塚治虫が、自分と同じ映像作家の道を歩きはじめた息子に宛てた手紙です。「この仕事は割の合わない賭け。」「その賭けに、生涯つきまといられる。」「自分が歩んだ道の厳しさを知っているからこそ言葉が続きます。」「危険な賭けに自分を投じるがよい。」「大きな試練を受ける。」「何度も徹底的に苦しみを味わうがいい。」「この手紙の息子である手塚真さんは、現在も映画監督、映画全般に関わるクリエイターとして仕事をされています。

手紙の良さを、改めて感じる事が出来ました。たまには手紙を書いてみませんか？

読書クラブ 生雲恭子

「あ・うん」 向田邦子 大和書房 (令和五年四月)

「門倉修造は風呂を沸かしていた長いすねを二つ折りにして焚き口にしゃがみ込み、真新しい渋うちわと火吹竹を器用に使っているが、そのいでたちはどう見ても風呂焚きには不似合いだった」

「あ・うん」の冒頭文である。門倉は軍需景気に潤う会社の社長で、水田仙吉は製菓会社の部長。高松支店から転勤で東京本店に戻る水田一家の為に風呂を沸かす門倉の浮き浮きした気分二人の関係が良く現れている。

これは神社の一对の狛犬にも似た「あ」と「うん」の仲の良い親友同士の物語である。水田は年頃の娘もいる愛妻家ですが、門倉と水田の妻たみがお互いに惚れているという秘めたる三角関係がこの小説の隠し味になっている。その二人が「もう絶交だ」と大喧嘩となった時、水田の娘さと子の恋人が「召集令状が来ました」と挨拶に来る。映画では門倉に高倉健、水田は板東英二、その妻たみには藤純子の三人が良い味を醸し出している。

読書クラブ 田村敏衛

「復活への底力」 出口治明 講談社現代新書 (令和五年五月)

別府市にある立命館アジア太平洋大学の学長(著者)は、令和三年一月脳出血で倒れた。失語症や右半身麻痺など重度の障害が残るも一年以上に及ぶ懸命のリハビリの結果、翌年三月、学長として職場復帰する迄の奮闘記です。発症は七十三歳の時、医師から毎日血圧を測るように指導されていたが面倒くささが先に立ってさぼっていた事や、多忙で三百三十二日働いていた事が脳出血の原因だった。CT検査の結果、手術はしない方針がとられたが失語症になった。東京の病院に移り復帰に向けてリハビリに取り組んだ。「僕は人生悔いなし、貯金なしをモットーにしています。やりたいことは全部やるのが一番楽しい人生だと思います」

朝六時に起床、八時にタクシーで出勤、八時四十分学長室に到着。午後五時半まで執務して六時頃帰宅し、午後十時くらいに就寝します。

医師の指導に基づいた日常の健康管理が大切であることの指南書です。

読書クラブ 小松崎克巳

「あちらにいる鬼」 井上荒野 朝日新聞出版 (令和五年七月)

著者の父で全身小説家と言われる井上光春と母郁子、そして光春の愛人だった瀬戸内寂聴をモデルに実在の人物三人の特別な関係を描く。

人気作家・長内みはるは講演旅行で知り合った作家・白木篤郎と男女の関係になる。一方、篤郎の妻は夫の奔放な女性関係に気付いてすべて承知しながらも決して心を乱さないで夫婦として穏やかな生活を続けている。しかし、みはるにとっては篤郎との関係は「書くこと」を通じてつながるかけがえのないものとなって行く。

モデルに書かれた寂聴は「井上光春と私の不倫が始まった時、作者は五歳だった。五歳の娘が将来小説家になる事を信じて疑わなかった亡き父の魂はこの小説の誕生を誰よりも深い喜びをもって迎えたことだろう。作者の母も父に劣らない文学的才能の持ち主だった。作者の未来は一層の輝きに満ちている。『百も千もおめでとう』と絶賛している。

読書クラブ 田村敏衛

「じんかん」 今村翔吾 講談社 (令和五年八月)

主人公は松永久秀(後の松永弾正)である。主君である三好氏を殺し、足利將軍を殺し、東大寺大仏殿を焼却し、信長に「この男は人が生涯なせぬ大悪を三つもやってのけた」と言わしめた。松永久秀を信長はなぜ支配下に置いたのか? 信長の越前攻めの際に、浅井長政が裏切った大ピンチにどうして久秀がその窮地を救ったのか? 一度信長を裏切りそして許されたのに、なぜ二度までも謀反に踏み切ったのか? 以上のように謎多き人物、松永久秀の一生を少年期から描ききった、人と人との織りなす間、表題の「じんかん」である。特に謎に満ちた少年期は読み応えがあります。人は何のために生きるのか? この社会で人は何をなせるのか? この答えの一つがこの本書にあるように思えます。

す。神も仏も信じない久秀が二度目の謀反を許さない信長によって、信貴山城で名器平蜘蛛の茶釜を抱えて自爆したのが、六十九歳であった。

読書クラブ 柴山光

「三四郎」 夏目漱石 三和書籍 (令和五年九月)

熊本五高を卒業して東京帝国大学に入った小川三四郎には、学問、恋、故郷という三つの世界がある。田舎出の純情な彼の前に現れた里見美禰子は当世風で都会的なお嬢様。三四郎が美禰子を初めて見かけたのは上京して間もなくの夏の日だった。大学構内にある心字池の畔で、夕陽を避けるかのように団扇をかざす女。腰かけている三四郎と野々宮の傍を看護婦に付き添われた彼女が通り、白い花を落として行った。

友人達と団子坂の菊人形を見に出掛けた日、三四郎と美禰子は人ごみを抜け出し二人だけになる。

美禰子は「迷子の英語をしまっていらして」「教えてあげましょうか」

「迷える羊（ストレイシープ）——わかつて？」

その後、三匹の羊の絵を添えた葉書などを送って来た彼女は自分の事が好きなのかもしれないと誤解する三四郎を尻目に、美禰子は突然結婚してしまう。

「迷羊」とは愛に迷える美禰子なのか、それとも何かにつけて迷える三四郎なのか。

読書クラブ 田村敏衛

「まいまいつぶろ」 村木嵐 幻冬舎 (令和五年十一月)

第九代徳川将軍家重は、幼少時小兒麻痺を患ったため成人してのちも言葉をはっきり喋れず、片足を引きずらねば歩けなかった。病のため頻尿で家重が席を立つとカタツムリが這ったような濡れた跡が残り、口さがない家来たちは陰で「まいまいつぶろ」と呼び嘲笑った。父の吉宗は長男の彼を廃嫡し、次男の田安宗武を世子にすべきか悩んだが、長幼の序を重んじ家重を将軍とした。実は家重は頭脳明晰で記憶力も抜群、他者への思いやりは人一倍持っている人物だった。

そんなある日、家重にとつて生涯の友ともなる、この世で一番の理解者、小姓として忠義の心厚い大岡忠光が現れる。忠光は出世も望まず、ただひたすら家重の言葉を聞き取りそれを家臣に伝える役目に徹して、二人で將軍職という重責に立ち向かって行くのである。主従を超えた深い結びつきは忠光が亡くなった際、「そなたに会えるのなら、もう一度生まれても私はこの身体でよい」とまで家重に言わしめたほどだ。

泣かすには読めない心打たれる本だった。

読書クラブ 猪端由紀子

「風よ、あらしよ」 村山由佳 集英社 (令和五年十二月)

重層的な作品を数多く輩出している恋愛小説作家、村山由佳による評伝小説である。

彼女の恋愛小説を読み慣れている人達には少し毛色が変わった小説であると思います。主人公は明治・大正・昭和を駆け抜けたアナキスト（無政府主義者）で婦人解放運動家、伊藤野枝です。彼女に焦点を当てた村山由佳渾身の評伝であります。生涯で三人の男と結婚。七人の子を産み、関東大震災後に憲兵隊の甘粕正彦らの手によって虐殺される。なんとむなししい死に方であろうかと思えます。

二番目の夫ダダイスト（一九一〇年代半ばにおきた芸術思想）の辻潤。三番目の夫でかけがえのない同士、大杉栄。野枝を「青鞥」に招き入れた平塚らいてう。四角関係の果てに大杉を刺した神近市子らの眼を通して、伊藤野枝が情熱をもって生きるその生き様をお読みいただければと思います。この作品は第五十五回吉川英治文学賞を受賞しました。

読書クラブ 柴山光

### 「命もいらす名もいらす」 山本兼一 NHK出版（令和六年一月）

幕末から明治にかけて、思想家・政治家として活躍した山岡鉄舟の生涯を描いた作品である。

鉄舟は幕臣の家に生れたが、十代で両親を失くし、苦勞も多く、また決して才に恵まれていたわけでもなかった。しかし、幼い頃から剣・書に励み、のちに禅を学び努力を重ね剣の達人と評されて、槍の名手、山岡静山の養子となり静山の妹と結婚する。その後、講武所の世話役となった鉄舟は、西郷隆盛、勝海舟らと共に、江戸城無血開城に力を尽くし歴史を変えた一人でもある。

時は明治へと移り、腕を見込んだ勝海舟の説得により、明治五年、宮内省に入り天皇陛下の侍従となる。

鉄舟にとって生きるとは、目の前の事を全身全霊で成しとげ、国と民が危険に晒されているなら、そこへ真っ先に飛び込んで救うこと。

「命もいらす名もいらす」私欲を持たぬ男と隆盛は言っている。国を愛し正義を貫抜き、動乱の時代を駆け抜けていった鉄舟は、今の日本を政治を、どうみているだろうか…。感動の一作である。

読書クラブ 渡辺治子

### 「わが母の記」 井上靖 講談社（令和六年二月）

認知症の母をテーマにした、一九七五年（昭和五十年）刊行の自伝的小説。母八重が八十歳から八十八歳で亡くなるまでを綴った「花の下」、「月の光」、及び「雪の面」の三部作で構成される。

老母は、家族との日常生活の中で時間の経過と共に、壮年期↓成年期↓思春期↓幼年期の記憶、つまり直近の過去の記憶から遡って少しずつ消しゴムで消すように忘れていく。楽しかったことは忘れ、辛かったことばかりを覚えている。年老いて記憶も曖昧で壊れたレコードのように同じことを繰り返す。昭和四十年代で公的介護制度が無かった

時代に、四人の子供と孫たち、周囲の人々が交代で面倒を見る姿に、母への深い愛情と家族の絆の強さを感じた。そして、長男である作者の母と周囲の人々に対する冷静な観察力、また優しさのある文章表現に感動した。

保険制度の元、認知症新薬の承認と使用に社会的な関心が集まる現在、私自身を含む家族の認知症発症への不安と新薬への期待を抱きながら、興味深く拝読した。時を経ても心に残る作品と思われた。

読書クラブ 足立秀之

「妻の終活」 坂井希久子 祥伝社 (令和六年三月)

ガンで、余命一年と宣告された妻。結婚生活四十二年。料理できない、掃除できない、洗濯機が使えない夫。私が死んだら、どうやって生きていくのか。「私は今、猛烈に反省している。こんなにも何も出来ない人にしたのは、私のせい。」その日から妻と二人の娘と三人で、夫が一人でも生きる為の教育がはじまる。

夫は自分が家で一番えらいと思っていた。女房、子供は俺の稼ぎで暮らせている。だから家事はやらなかった。

しかし娘たちは、自分本位に生きてきた自分と、くらべものにならないくらい強く優しい。妻が愛情をかけて育ててくれたと感謝の気持ちでいっぱいになる。

夫は、妻と娘たちの教育のおかげで、なんとか一人でも生きていけそうと思われるほどがんばった。

「そして 妻の終活は間にあった」

読書クラブ 生雲恭子

「銀の匙」 中勘助 小学館文庫 (令和六年四月)

古い茶箆筒の抽斗から見つかった銀の匙。忘れられていたこの匙は病弱だった私の口に菓を飲ませる為、伯母が何処からか探して来たものだった。

伯母の愛情に包まれた幼年期、繊細で感受性豊かな男の子は沢山の出会いや別れを経験し、青年へと成長して行く過程を美しい言葉で回想する自伝小説です。

特に明治二十年から三十年にかけて初めての友達お国さんとの平和な日々、腕白坊主達が待つ小学校への入学、隣に引越してきたおけいちゃんに対する淡い恋心などが、著者の目線で丁寧に綴られている。

明治四十三年、前編が執筆されたのを師の夏目漱石に見て貰ったところ「ありやいいよ、原稿が読みにくいが綺麗だ、細かい描写、独創がある。」と褒められ、東京朝日新聞に連載された。

戦後の灘中学では、この作品一冊を三年間かけて読み込む授業を実践し、同校を名門校へ導いた。

読書クラブ 田村敏衛

「恋歌」 朝井まかて 講談社 (令和六年五月)

「君こそ恋しきふしは習いつれ、さらば忘るることもをしえよ」(恋することを教えたのはあなただからどうか忘れ方も教えてください)樋口一葉の師、中島歌子が夫に贈った歌です。

中島歌子の半生の物語「恋歌」は作中過去と作中現在を往き来しながら、弟子の三宅花圃と古女中中川澱が歌子の手記を読んでいるという構成で物語が展開します。

水戸が舞台なので私達に親近感もあり、梅の描写も多く、和歌が巧みに挿入されていて読みながら心に響きます。幕末の江戸の商家の娘として育った歌子(当時は登世)は、一途な恋を成就させ水戸藩士(林忠右衛門)に嫁ぐ。しかし夫は尊皇攘夷の急先鋒天狗党の志士。歌子は水戸の内乱に巻き込まれていき波瀾万丈の人生を送ります。幕末から明治へと駆け抜けた歌人の生涯とこの小説「恋歌」を通していきあえる物語です。二〇一四年直木賞を受賞しました。

読書クラブ 柴山光

「しろばんば」 井上靖 新潮文庫 (令和六年六月)

「しろばんば」とは白い綿毛の分泌物を出すアブラムシ類の昆虫で雪虫ともいう。大正初期、天城山麓の美しい自然を背景に作者の少年時代を描いたものです。主人公の洪作少年は母が妹を身籠った五歳の時から家族と離れ、母の実家がある湯ヶ島で曾祖父の愛人だったおぬい婆さんと二人で敷地内の土蔵で暮らした。中学受験の時、おぬい婆さんは亡くなり、洪作は父の新しい赴任先浜松に旅立つ。その途中の街で見たものは、「風が吹いていて道路には砂煙が上がっていた。映画の広告の為の楽隊がその埃の中を賑やかな楽隊の音を撒き散らしながら近付いて来た。大太鼓と小太鼓、それにクラリネットと楽器も三つであり、楽師も三人であった。そして、三人の楽師の前を大きな幟を担いだ二人の老人がのろりと歩いていった。洪作は路傍に立って楽隊の通り過ぎるのを見ていた。数人の小さい子供達が楽隊の背後からついて行った。」鮮明な文章に感動した。

読書クラブ 田村敏衛

「広重ぶるう」 梶よう子 新潮社 (令和六年七月)

江戸時代の町絵師、歌川広重の生涯が彼を取り巻く人々との関りを通して生き生きと描かれている小説である。火消し同心の下級武士の家に生まれ、美人画は色がなく、役者絵は似ていないので一向に人気が出ず、うだつが上がらない広重。そこに舶来の「ベロ藍」(プルシアンブルー)が出てきたことによつて風景を描きたい、江戸の風景を青で描きたいという広重が生まれるのです。彼を支えた妻の加代、一番弟子の昌吉が逝った場面では広重の心中が察せられ思わず落涙する場面でした。摺師、彫師、版元、弟子、業界すべてが生命体として描かれ、初めてそういった個々の力の結集である素晴らしい「東海道五十三次」ができあがったことがわかります。若かりし頃から苦勞した歌川広重の成長物語であり江戸情緒を感じさせ、面白く読める小説です。第四十二回新田次郎

文学賞を受賞しました。

読書クラブ 柴山光

「文豪たちの友情」 石井千湖 立東舎（令和六年八月）

親友、ライバル、愛憎など、一筋縄ではない文豪同士の友情にまつわる逸話と彼らの人生と作品に迫る。このうち詩人の中原中也とその恋人で女優志望の長谷川泰子、それに文芸評論家となる小林秀雄との奇怪な三角関係が凄い。「そばに置いても邪魔にならない女だ」と早熟で生意気な中也は京都時代に知り合い、十七歳で同棲を始めた泰子を友人に紹介した。二人は上京後、東大仏文科の学生で生涯の友となる宿命のライバル小林と出会う。ところが泰子は中也を捨て小林の元に走った。別離の当日、リヤカーで荷物を運び出す泰子を中也は静かに見送った。「あなたは私を愛し、わたしはあなたを愛した。（略）人にはそれが、嫉（ねた）ましかったのです。多分、そしてそれを偷（ぬす）もうとかかったのだ。嫉み羨（うらや）みから出発したくどきにあなたは乗ったのでした」中也は三十歳で急逝し、小林は「在りし日の歌」と題した中也の詩集を刊行した。

読書クラブ 田村敏衛

「椿山（短編集）花の顔（かんばせ）」 乙川優三郎 文藝出版（令和六年十月）

下級武士に嫁いで二十年。「市村さと」と姑との葛藤を描いた作品です。

夫は藩主の参勤交代に伴い江戸へ。ひとり息子も勉学のため家を離れ姑との二人暮らし。姑の厳しい小言にも逆らわず下級武士の貧しい家計を内職で支えるさと。時代小説ではよくある女性の姿だが余りに低い嫁の立場が心にささる。

やがて姑は認知症を患う。ここで介護の明け暮れが生々しく描かれており、この日々が続けば介護側もいつか壊れるのではないかと思われた。しかし病により乱暴になった姑が、なぜか雪の降る日は穏やかな優しい表情を見せ荒んださとの心も和らぐ。

降る雪を飽きずに眺める姑に舞う雪が、まるで桜の花のように美しく二人の間に流れるひとときの安らぎが作品の救いとなっています。

その昔、現実にも何事にも耐え忍んだ女性達に思いを馳せる時、この時代、自由な生き方を選べる女性の立場がなんと良きことかなと改めて知る作品でした。

読書クラブ 渡辺治子

「富山売薬薩摩組」 植松三十里 エイチアンドアイ（令和六年十一月）

富山売薬は、江戸元禄期に始まり、現在も継続する。薬を各家に予め預け置き、使用された分だけの薬代金を後日受領する「先用後利」システムと、馴染みの得意先で幾代も受け継がれる「信用商売」が特徴である。本書は、江戸時代末期、富山藩の能登屋主人 密田喜兵衛を主人公とした富山売薬「薩摩組」と、破綻寸前の財政改革を断行し

た薩摩藩家老 調所広郷の史実に基づく小説である。(二〇二三年十一月発行)

莫大な借金に喘いでいた薩摩藩は、喜兵衛に造らせた船で「薩摩組」を通じて蝦夷昆布を手。琉球を経て清国に密輸し、巨利を得て借財を返済する。代わりに、密輸で手に入れた薬種を「薩摩組」が危険を冒して販売するが、商いの中で庶民の各家の事情を踏まえて、彼らの経験・知識を薬と共に提供し、医療に貢献するという志に深く感じ入った。

喜兵衛が三途の川を渡る際に残した言葉、「時代が代ろうとも、薬を届けるという尊い使命が途絶えるはずはない」は、現在の我々と共有できる。益々進む高齢化社会で、良い薬をより早く、より安定的に患者様と御家族の元に供給する事の重要性を改めて感じた。

読書クラブ 足立秀之

### 「バタン島漂流記」 西條奈加 光文社 (令和六年十二月)

漂流記と聞けばすぐ浮かぶのが大黒屋光太夫、ジョン・万次郎だ。片やロシアまで、片や鳥島を経て米国へと行き十年をかけて帰国した。

この物語は尾張からフィリピンのバタン島まで大嵐のため流された十五人の男たちの帰国までの二年間を描いている。光太夫や万次郎と比べると期間こそ短い、激しい嵐に遭遇したときの恐怖、大海原ばかりの日々に島を発見したときの喜びも束の間、上陸したら原住民に船は破壊され全員捕われて奴隷として酷使される。しかし帰国を諦めない船頭に励まされながら島の人々に馴染みつつ協力し合って生きる十五人。ところが貧しい島では高齢者は断崖から海へ落とされる掟に従い、船頭と梶取が消されてしまう。姥捨山ならぬ姥捨海である。残された仲間はずいぶん島を脱出し故国へ帰る決断をする。船大工見習だった和久郎を中心に、道具はたった斧一本で全員力を合わせて半年がかりで船を造る―家族の待つ懐かしい故郷へ帰るために。現在の常滑市に記録も残っている三百五十年程前の実話である。

読書クラブ 猪端由紀子

### 「コンビニ人間」 村田紗耶香 文春文庫 (令和七年二月)

人の生きづらさというのはいつの時代もあると思う。コンビニ人間の主人公である古倉恵子、三十六歳は普通の家に生まれ育ったが、奇妙がられる子供だった。自分が普通と思っていたことが他の人は普通ではないことを色々な経験により認識し始めていた。その為、学生時代は余計なことを口にしないうことに成功したまま成長した。ある日、恵子はコンビニでアルバイトを始めた。恵子にとって普通という状態が理解できず、コンビニの業務のようにマニュアル化された作業に従って行動することが恵子には必要で、その状態が心地よかった。コンビニで出会った白羽との半同棲生活から結婚する試みや、普通に就職する試みをする過程でこのマニュアルに無い行動が本来自分に備わっている本能と相違していることに気づいた。人それぞれ普通という概念が異なるが、本書は

一般的に普通ではない人が如何にして普通として溶け込み生きていくかを書いた書物である。

読書クラブ 水落秀樹

「旅する巨人 宮本常一と渋沢敬三」 佐野真一 文芸春秋出版（令和七年三月）

人生の七分の一を旅に、十六万キロを歩いた民俗学者の宮本常一の業績と、そのパトロンの渋沢敬三との三十年に及ぶ交流を描いた評伝。明治四十年、山口県の周防大島に生まれた宮本は小学校の教師をしながら高度成長期前の日本列島の津々浦々を歩いて古老達から消え行く民間伝承を聞き取り、代表作の「忘れられた日本人」などに著した。

渋沢敬三は「日本資本主義の父」と言われる渋沢栄一の嫡孫として明治二十九年に生まれた。渋沢家の重庄を背負った敬三は銀行マンから日銀総裁や大蔵大臣を務めるなど財界人として活躍する一方、動植物の化石や郷土玩具を集めた博物館をつくり、パトロンとして多くの民俗学者を育てました。特に宮本には物心両面で支え、強い絆で結ばれていました。この本は二人の三十年に及ぶ交流と宮本民俗学に光を当てたもので、大宅壮一ノンフィクション賞を受賞しました。

読書クラブ 田村敏衛